

実存的自由の根拠

斎藤武雄

実存の自由がヤスパースにおいて如何なる根拠に立つて考えられているかを考察するのが本稿の目的である。本稿の分節は次の如くである。

- 一 内在的自由の媒介と超越
- 二 実存的自由―選択・決意
- 三 決意の直接性と交通
- 四 自由と必然
- 五 実存的自由の根拠

尚お本稿においてはヤスパース著「哲学」からの引用は巻数と頁数とのみを示し、「真理について」からの引用はV.d.W.の略号と頁数のみを示す。

一 内在的自由の媒介と超越

ヤスパースが実存的自由 *existentielle Freiheit* を「知としての、恣意としての、法則としての自由 *Freiheit als*

Wissen, als Willkür, als Gesetz」(II, 177-179) 及び「理念としての自由 Freiheit als Idee」(II, 179-180) と區別すると共に、それらを媒体とすると考えることは、彼の実存の根本構造から由来するものである。これらの諸の自由は彼の包括者の諸様式から見れば、現存在、意識一般及び精神におけるそれぞれの自由であつて、これらの諸様式を包み且つ越える実存の自由は、当然これらの諸様式における自由を媒介し且つそれらを越えているものとしてそれらと區別されなければならないのである。実存的自由は本来の自己を選択する無制約的自由であるが、「かかる選択は徹頭徹尾媒介されて、vermittelt いる」(II, 181) と言われるのも、包括者の諸様式の相互關係から当然のことであり、かかる包括者の思想が、「哲学」に表現されている絶対的意識の展開である(2)と私は解するが故に、実存的自由が媒介されたものであると同時にその媒体を超越する無制約的自由であることについては絶対的意識の性格からの根拠づけがなされなければならない。しかしこのことはもう少し実存的自由について論述した後になされなければならない。

上述の如き諸の自由を離れて実存的自由は存在しない。「私は知において尚お未だ自由ではないが、しかし知なしには如何なる自由もない。」(II, 177) 「内実なき故に、恣意は尚お未だ自由ではない。しかし恣意なしには如何なる自由もない。」(II, 178) 「如何なる自由も法則なしには存在しない。」(II, 179) このように実存の自由は知、恣意、法則を離れた抽象的な空虚な又盲目的な自由ではない。知と法則とは意識一般において存在し、恣意は現存在において存在する。即ち実存的自由は生ける人間的現存在とそれがその中で生きる環境世界とを離れては存在し得ず、又自然必然の法則性を離れての自由でもない。更に自然必然性 *Naturnotwendigkeit* と違ふところの「それに私が服従することもできれば或は服従しないこともできるところの、行動と動機づけとの諸の規範の必然性 *Notwendigkeit von Normen*」(II, 178) である「法則」に従うところの「超越論的自由 *die transzendente Freiheit*」(ebd.) を離れた自由は実存の自由ではない。更にまた実存の自由は「或る何物かを忘れることなしに、私が総体性 *Totalität* か

ら、私の見ることに決断することとの限定を、私の感ずることと行動することとの限定を、獲得することが多ければ多い程、私は益々私を自由であると意識する」(II, 179—180) ところの「理念としての自由」(II, 179)を離れたものではない。

しかし現存在の自由たる恣意としての自由は任意 *beliebig* であり、客観性乃至必然性を媒介しない故に真の自由ではなく、知としての乃至は自然法則性としての又當為法則性としての自由は、それぞれの必然性に従うことを以て自由とするのであって、これも亦真の自由ではないとヤスパースは考える。この考えからすると自然法則性を根本とする自然主義・実証主義・唯物論における自由も、當為法則性を根本とするカント的な超越論的自由も、歴史性をもち時間的狀況における具体的実存には的中しないのである。ヤスパースは超越論的自由の「内実は指導する理念の総体性」と自らの選択、*Wahl* における自己存在の歴史的「回性、*Einmaligkeit* との間の両極性 *Polarität* において発源する」(II, 179) と言う。このように、実存の自由は、ディルタイ流に言えば、⁽³⁾「自然主義」の自由を超え、「自由の觀念論」の自由をも超えるものである。それは更にヘーゲルを代表とする「客観的觀念論」の自由即ち「理念としての自由」(精神としての自由)をも超える。「常に私が決断し且つ行動する時にはしかし私は総体性であるのではなくて、却ってその客観的に特殊な状況、*Situation* における限定された諸の所与と共にある一箇の自我 *ein Ich* である。」(II, 180) として又「私は、それから私の現存在の時間的生起が必然的結果として展開するところの一般的理念の舞台ではなくて、私は先ずさしあたり次のことを経験する。即ち、総体性が決して完成しないうちに、そして又可能的自己存在の拡張がその限界に到達しないうちに、しかも既に時が迫ってくる、ということ。私が全体的 *sämtlich* 諸前提と諸可能性との現前化 *Vergegenwärtigung* において理念の発展を待とうと欲する場合には、私は決して行動し得ないであろう。」(ebd.) これらのことは可能的実存としての人間が理念の総体性という抽象性によってのみ自ら

の行動を一義的に決定すべきものでもなく（実存は理念を媒介するも、無限に開いた態度で完結的理念を突破するから）、又理念そのものが可能的実存そのものに完全に実現されていないところのそれぞれの時に、既に可能的実存は行動への決定を迫られるのであり、更に又実存は現存在において、状況において、そして独自の唯一性において、生きる態度を決定しなければならない、ということを示している。しかしこの考え方は理念として立てられるものは実践的であれ、理論的であれ、何れの場合においても、それは有限である、即ち内在的である、即ち絶対的ではない、というヤスパースの包括者思想に基づいているのである。この思想において「交通」と「歴史性」とにおける「⁽⁴⁾自身」も考えられるのであり、具体的歴史性における単独者の自由たる実存の自由が「理念としての自由」を超越することがこの思想から当然帰結されるのである。

かくして実存の選択が必要になってくるが、この選択は実存が自らの本来性を選択することであり、それが決意 *Entschluss* である。このことは次節で取扱うが、「かかる選択において私ははじめて根源的自由であるところの自由を意識する」(ebd.) である。しかし本来のなかる自由の意識は本来の自己存在たる実存そのものが自由であるからして可能なのである。

- (一) Vgl. Jaspers, *Von der Wahrheit*, S. 123ff. (Die gegenseitigen Bezüge der Weisen des Umgreifenden.)
- (二) Jaspers, *Philosophie II*, S. 255ff. (Absolutes Bewusstsein)
- (三) Vgl. Dilthey, *Gesammelte Schriften*, Bd. VIII, S. 75ff. (Die Typen der Weltanschauung und ihre Ausbildung in den metaphysischen Systemen.)
- (四) Jaspers, *Philosophie II*, S. 24ff. (Erster Hauptteil: Ich selbst in Kommunikation und Geschichtlichkeit.)

二 実存的自由—選択・決意

実存の自由は選択としての自由であり決意としての自由である。しかも選択と決意とは同一である。「彼自らであるところの人は、それにおいて自ら自身と他の実存とに対して自らを頭わにしながら、彼の歴史的・一回性において選択する。」(II, 180) このことは歴史性と交通における自己が自らを選択することを意味する。これ実存が自己及び他人に対して公明であり、そして単独者であるからであり、かかる選択は実存の自己生成の運動として実存の絶対的意識を以って遂行されるのである。この選択の公明性と歴史的・一回性とは絶対的意識の愛の性格によって可能である。そして選択するとは恣意の如く客観的なものを任意に選ぶことではなく、本来の自己を選ぶことである。これは実存とは「自己自身に、関係する」(I, 15) ものであるからであるが、しかし本来の自己たる「実存は決して客観となることのないものである」(ebd.)⁽¹⁾ から、客観的に選ばれ得ない。それ故、自由としての選択は主体の自己限定として、自らが自らたらずと決意する以外に自己選択はない。これ選択と決意との同一性の意味であり、自己選択は二者択一に非ざる所以である。

「むしろ選択の決定的なものは、私が、選択するということである。」(II, 181) 選択が自己選択であるから、私が選ぶ主体であることは言うまでもないのに何故私が、ということを強調するのだろうか。それは私が選ぶとしても私が内在を根拠として私を選ぶのではなくて、私の絶対的意識としての愛が即ち「根拠としての愛」(V. d. W., 988) が原理を内在(現存在、意識一般、精神、世界)に仰がずに、対象化され得ぬ超越者に直面して、公明な自主的な自己限定として、自らを選ぶのである。

内在と超越者との中間的存在としての実存の選択の内実は、内在を媒介し且つそれを超越し、自らの究極の根拠た

る超越者に根源する実存の現実である。「限定性と個性との空間を浸透して、歴史的な、客観的には見透され得ぬ内実が、偶然性と他様にもあり得るところの意識を以てではなく、却って自己の根源的必然性の意識を以て、現存在にもたらされる」(II, 181) のはこのことを示すものである。かくの如く選択の内実が実存的必然性をもつことは後述する所に譲るが、かかる必然性の根拠も究極においては「自己自身に、関係し、且つ、そうすることのうちで、超越者に、関係するところのものである」(I, 15) 実存の根拠たる超越者なのである。しかし選択は現実逃避のそれではなくてその内実は「現存在にもたらされる」ものであり、広義の現存在たる内在のすべてに実現されるものであるのが、ヤスパースの自由の本質である。「かかる選択は、現存在において私自身であらうとする決意(Entschluss)である。」(II, 181) 歴史性も交通も現存在を離れた抽象的なものではないから、状況における私自身であらうとする決意が自己選択であり、自由である。そこにヤスパースの自由が空想的な絶対自由ではない所以がある。その自由は自己を選ぶことであるが、それは状況を離れず、常に実現との関係にある。従って実存的自由は社会的(客観的)自由例えば政治的自由の有無によって決定的には限定されないものであるが、政治的自由の根拠として、常に政治的自由の実現を目指す自由であることは当然である。⁽³⁾ 原爆禁止の問題も、⁽⁴⁾ 平和の問題も⁽⁵⁾ 実存的自由の根拠をおく。そこでは実存の理性が根本となるが理性の根源であり根拠であるものは実存の絶対的意識としての愛である。それ故政治的自由を真に実現する根拠は愛である。愛については後述する。

(1) 現存在 Dasein (人間) の決意性 Entschlossenheit が自由であることはハイデッガーにおいても同様である。「良心をもとうと欲すること Gewissen-haben-wollen」(Sein und Zeit, S. 288) は良心を選択する自由である。(Vgl. S. u. Z., S. 287ff.) これも主體的自己選択は決意以外にはあり得ぬことを示すものと解し得る。

(2) 「あらゆる自由の制限を止揚する」(II, 194) ものが「絶対的自由」であるとして、ヤスパースはヘーゲルの自由をその代表的なものとしている。「絶対的自由の幻影 Das Phantom der absoluten Freiheit」として、かかる自由を彼は批判する。

(II, 194-195)

(3) Vgl. Karl Jaspers, *Die Atombombe und die Zukunft des Menschen*, 1958, S. 296ff.

同書においてヤスパースは *Exkurs über politische Freiheit* (政治的自由の附説) として、政治的自由は実存的自由に根ざすと共に、政治的自由において実存的自由は実現されることを論じている。ヤスパースはここでも、人間の在る限り実存的自由は可能であり、政治的自由のない場合でもそれは可能であると言っている（「哲学」第二巻一六六頁に言っているように）がしかし現代では政治的自由なしには実存的自由の場がないとまで言っている。実存は現存在乃至世界の中にありながら、それらを超越し同時にそれらにおいて自らを実現するものである、と彼は考えるのであるから、実存的自由なしには真の政治的自由がなく、そして実存的自由の場としての政治的自由が言わば実存的自由の肉体とも言われるべきものとして重要であることは当然と言わなければならない。彼にあっては客観的 *erkennbar* な政治的自由は主体的 *unerkennbar* な実存的自由に基づいてはじめて真なるものとして可能である。

「法の地盤は一般に精神的なもの、*das Geistige* であり、更に精密に見れば法の立場並びに発足点は自由なる意志である」(Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts, Einleitung* §4.) といひ、又「国家は具体的自由の現実態である」(a. a. O. §260.) というように、ヘーゲルにおいても精神的自由が政治的自由の根源であることは明らかであるが、その精神的自由はヤスパースから見れば「理念としての自由」であって、それは実存的自由ではない。

(4) 「自由な人類の世界秩序 (*eine Weltordnung der freien Menschheit*)」(Jaspers, *Rechenschaft und Ausblick*, S. 316) の思想の基礎はやはり実存的自由である。又「ヤスパースは *Atombombe und die Zukunft des Menschen*, 1958. においても、最後の頼りになるものは理性 *Vernunft* であるとして、それを強調しているが、この理性は実存の理性であって、それは本来の自由なのである。

(5) Vgl. Jaspers, *Wahrheit, Freiheit und Friede*, 1958. ここでヤスパースは、世界平和は真理に基づく理性的自由による根拠をおかねばならぬことを言っている。かかる自由は実存的自由には他ならない。

「現存在における私自身であろうとする決意」である選択は歴史性における、又交通における決意である。歴史性は「現存在と実存との統一」(II, 122)、「時間と永遠との統一」(II, 126)、「自由と必然との統一」(II, 125)である。それ故現存在乃至時間を離れては歴史性はないが、現存在・時間を超えて永遠・超越者に触れることなしには（それ

との関係なしには)歴史性はない。ヤスパースの自由は必然との統一であるが、実存が「自由と必然との統一」としての歴史性における自己存在である故、それは当然であると言わなければならない。かかる必然(実存的必然)は広義の現存在(現存在、意識一般、精神、世界)におけるそれぞれの必然を媒介しつつ、しかもそれらを超えている。実存的必然の根拠は存在そのものたる超越者そのものであり、それは一切の対象的なものを超越した一者たる普遍である。最も個別的な実存が最も普遍的な超越者に根拠をもつということは逆説の如く見えるが、かかる一者に直面する実存の意識(愛)そのものが、最も広く開き、最も広く開くが故に最も狭く個別者に向うところに実存の真相が開明され得る可能性が存する⁽¹⁾。

後にも説く如く実存的必然の究極的なものは実存の自由が超越者によって贈られるという意味のものである。「決意は、私が意欲しながら本来的であり得るといふ贈物 *Geschenk* として意志に尚お現われるところのものである。即ちかかる贈物から、*aus* 私が意欲し、しかし私はかかる贈物をもはや欲し得ないのである。」(II, 18)即ち決意とは単なる主観的決心ではなくて、あらゆる内在を媒介して、無制約的な開いた心で超越者に直面する実存の絶対的意識の必然なのである。具体的選択において、私は本来的にそれ以外にはあり得ないという必然が決意の必然性であるが、この必然性の根拠は超越者に向い、超越者に向い、それを信じて生きる実存の愛によって必然が感得され(経験され)る。即ちかかる必然の存在根拠は超越者であり、かかる必然の開明根拠は愛である。

実存的選択は可能的実存自らが本来的自己を選ぶことであり、本来の自己の回復 *Wiederholung* の意味をもつ。回復は愛の本来の自己への結合性に基づく。この結合性は後述する。そして選択は同時に可能的実存が現実的実存となる自己生成 *Selbstwerden* の運動であると見るべきである。この運動は実存の可能性としての無限の運動であるが、この動性は超越者を信仰することから来る安静と共にあるものであって、この動静両面は理性のそれであり、理性の

根源としての愛のそれである。⁽²⁾ 絶対的意識の「根源における運動」⁽³⁾の諸契機たる無知、目まいと戦慄、不安、良心は実存の選択における自由の運動であり、前三者を通しての良心における絶対的意識の運動が選択なのである。⁽⁴⁾ しかし良心を可能にする愛こそ実存の本来的可能性としての自由をその根本性格とするものである。尚お「現存在における絶対的意識の保証」⁽⁶⁾の契機たるイロニー、遊戯、羞恥、平静も自由を根本性格とするものであり、かかる諸契機を通さない決断は真の選択ではないのである。

前述の如く「かかる選択は徹頭徹尾媒介されている」のであり、あらゆる客観的なもの及び主観の無限の反省を媒介して行われる。更にそれは、後述する如く、交通的である。それは熟慮を通して行われ、熟慮なしには存しないとはいへ、「しかし実存の絶対的決断は熟慮の結果ではない」(II, 131)であり、「決意そのものは飛躍においてはじめて存する」(ebd.)。熟慮によってはただ蓋然性に到達するだけであって、我々は実存として決意し得ない。「何となれば決意は無制約的、unbedingtであるからである。」(ebd.) 更にもし機会の計算の結果我々の行動の決定がなされるならば、「決意は一般に消滅している」(ebd.)のである。「何となれば決意においてはもはや結果が真理の究極の標準ではなくて、却って決意においては、挫折においても依然として真なるものが把握されるからである。」(ebd.) 決意は単に「直接的な恣意ではなくて、決意において私は、私の現存在の歴史的具體性において私が欲するところのものを、知るのである。」(ebd.) これらの言葉は、決意は、媒介的であるにも拘らず、無制約的であることを語っている。かかる無制約的決意(選択)は如何にして可能なりや、という問題が実存的自由の根拠の考察の中心課題となる。これに関しては上述においても既に所々において我々は触れたのであるが、「決意の直接性と交通」及び「自由と必然」を取扱ひつつ又その後我々はそれについての論述を試みなければならない。

- (1) 単独者へと向う愛が同時に無限の広さをもつことについては、拙稿「実存的交通の根拠の問題」(弘前大学「人文社会」第五号所載) 参照(特に同誌六頁)。
- (2) 「愛は理性の魂である」(V. d. W., 992)。
- (3) Philosophie II, S. 261ff. Bewegung im Ursprung. (1. Nichtwissen.—2. Schwindel und Schaudern.—3. Angst.—4. Gewissen.)
- (4) 「良心は運動において区別することと決断することとを要求するところの、転回点における声である。」(II, 268)
- (5) 愛の性格については Philosophie II, S. 277ff. 及び Von der Wahrheit, S. 990ff. 参照。更に拙稿「実存的交通の根拠の問題」(弘前大学「人文社会」第五号所載) 参照。
- (6) Jaspers, Philosophie II, S. 284ff. Die Sicherung absoluten Bewusstseins im Dasein. (1. Ironie.—2. Spiel.—3. Scham.—4. Gelassenheit.)

三 決意の直接性と交通

決意は徹頭徹尾媒介的であるが、「それにも拘らず決意は全く直接的、unmittelbar でもある。しかし決意は現存在の直接性ではなくて、本来的自己存在の直接性である。決意と自己存在とは一つである。非決意性は一般に自己存在の缺乏である。」(II, 181—182) 決意は恣意の如き任意の直接性ではなくて、決意は「彼が彼自身であるが故にそのようにあらざるを得ぬところの人の自由である」(II, 182) のであって、この直接性とは必然に決意が自己に到達している確信であり、自己の本来性そのものの不可決の性格を決意は示すのである。

かかる「決意の選択は、把握されたものが無制約的に堅持されるといふ重要さをもっている」(ebd.) のであり、根源的決意において把握された現存在は、それから私が生き、それからあらゆる新しいものが魂を吹込まれるところの泉、Quell である」(ebd.) のであって、無制約的に真実な自己を選ぶことは選ばれた自己の現存在を堅持せん

とし、実存の忠実な一貫性によって、自らの責任を可能にする。「かかる選択の自由においては私は私に対して私自身を全く責任あるものとする」(ebd.)のであり、「選択は、私が自由な決断において単に世界において行動するのみならず又私自身の本質を歴史的連続性において創造するという、意識に対する表現である。」(ebd.)かかる連続性即ち一貫性はかくの如き決意の創造する私の本質の連続性であつて、これが実存的必然性の一面をなすものである。

決意は可能的実存自ら(固有)の歴史性と、他の可能的実存との実存的交通において、状況(2)を限界状況として把握して、且つ超越者に直面して、あらゆる内在的なもの乃至必然的なものを媒介して、行われるが、結局、決意は本来の自己を選択することである。ここにその直接性がある。「決意において私は自由を経験する、その自由において私はもはや或物に關してだけではなくて私自身に關して決断するのであり、その自由においては選択と自我との分離は可能ではなくて、私自身かかる選択の自由である。單なる選択は諸の客觀的なものの間の選択としてのみ現われる。しかし自由は私の自己の選択として存する。……私は……恰も自由がただ私の道具であるかのように選ぶことはできない。そうではなくて、私が選択するとき私は存在し、私が選択しないときには私は存在しない。」(II, 188)客觀的でない自己存在の選択は可能的実存の主体の自己生成の道としての決意である。決意はしかし、直接性をもつと言つても、直接的に一次的に本来の自己を完全に選み取り、不動のものとするものではない。「私自身何であるかは、私は尚お決断するであろうが故に、尚お開いて offen いる、即ちその限りにおいて私自身は尚お未だ存在していないのである。しかし現存在現象における非究極的存在としてのかかる非存在は、私が選択しつつ決意において根源となる所では、私の存在の実存的確信によって遍照される。」(II, 182-188)このことは決意によって永遠に触れたものが可能的実存の実存的確信となり一貫性を以って実存の現象を照らし、次の新たな決意による決断の基盤となることを物

語っている。これ超越者に直面する愛の一貫性（忠実）に基づくのである。

次に選択という実存の自由は決意として交通的であることについて述べよう。「選択におけるかかる決意は根源的に交通的、*kommunikativ*である。私自身を選択することは他人を選択することと共にある。」(II, 183) 自己選択は同時に他の自己を選択することである。これは本来的自己となることは他の自己との交通においてのみ可能であるというヤスパースの根本思想に基づく。⁽³⁾しかし他人を選ぶことは他人の間から自らの好む人を選ぶことではない。「しかし、他人を選択することは、私が前以って私を既に存立するものとして絶対的に立てそして、それらと私が私を結合せしめんと欲する少数の人間をその際それらの間から選び出すところの人々の外に私を置くというような仕方で行くのではない。その場合には恰も他人なしにも私が既に存在しているかの如く、私は比較しながら評価するであろう。他人を本来的に選択することは一箇の選出ではなくて、その人と共に私自身としての私を見出すところの他の人との無条件的交通の根源的決意である。」(ebd.) 他人を選ぶことは他人と無条件的交通をなさんと根源的に私が決意することである。交通への決意こそ他人を選ぶことである。「交通意志」たる理性によってこの決意は可能であり、理性は愛に基づくのである。⁽⁵⁾「愛は理性の魂である。」(前出) 愛は「交通の源泉 *Quelle* である」(II, 71)。交通への決意が他人を選ぶことであるということとは客観的内在的には理解不可能であろう。主体の決意としての交通せんと欲することが人間の本来の自由という意味での選択なのである。ここでも根本的には自由とは選択であり、自己選択の決意であることには変りはない。それは交通なしには自己となり得ないとヤスパースが考えるからである。

「私が私自身としての私を見出すのは私が私を見まわしながら求めることによってではなくて、無制約的な歴史的な交通の決意への用意 *Bereitschaft* によってである。」(II, 183) 「その場合には私の外的な運命 *Schicksal* のみならず私

の存在も亦他人のそれとかかわり合うのである。決意としての選択の根源には如何なる二者択一も問も存しない。かかる根源の確実性からはじめて二者択一が決断されそして問が解答される。」(ebd.) 選択とは本来的には本来の自己を(他己と共に)選ぶことであるが故に、それは二者択一でもなく又問をもつものでもない。それは自己と決意との同一性、決意の絶対性、無制約性による。

自己が自己を選択する決意としての自由は客観化され得ぬものである。それは主体的真理であると言い得よう。「自由は自己存在の外には存しない。対象的世界においては自由にとっては場所も間隙も存しない。」(II, 191) として「私自身であり得るところの現存在における存在は、自由とその根拠をもっている」(ebd.)、即ち可能的実存の根拠は自由である。実存そのものが上述の如き選択・決意をなし得る、という本来の可能性こそ実存の根本性格としての自由なのである。

ヤスパースの自由から見れば、悪とは自己選択の非本来性ということになる。本来的自己選択は善、非本来的自己選択は悪ということになる。従って悪を可能にするものは自由であることになる。善悪の間における選択ではなくて本来の自己を選ぶ⁽⁶⁾ば善、然らざる場合には悪である。

- (1) Vgl. Philosophie II, S. 201ff. Grenzsituationen.
- (2) 本来の開示性としての自己企投 Sichentwerfen たるハイデッガーの決意性 Entschlossenheit も、本来の自己を選ぶところの自由であることはヤスパースの決意性と同様であるが、それは交通的 kommunikativ ではない。
- (3) Vgl. Philosophie II, S. 50ff. Kommunikation. 更に拙稿「ヤスパースにおける Kommunikation について」(東京文理大「哲学論叢」第十五輯所載) 及び拙稿「実存的交通の根拠の問題」(弘前大学「人文社会」第五号所載) 参照。
- (4) 「理性は総体的交通意志」(der totale Kommunikationswille) (V. d. W., S. 115, Der Philosophische Glaube, S. 40) であり、「無制限な (unbeschränkter) 交通意志」(V. d. W., S. 115, Der Philosophische Glaube, S. 40) であり、「無制限な (unbeschränkter) 交通意志」(V. d. W., S. 115, Der Philosophische Glaube, S. 40) であり、(Jaspers, Vernunft und Wiedervernunft in unserer Zeit, S. 36)

- (5) 理性が愛に基づくことについては拙稿「ヤスパース『理性と実存』の批判」(日本哲学会「哲学」第九号所載) 参照。
 (6) Vgl. Philosophie II, S. 170ff. (Der böse Wille.) auch, Das radikal Böse bei Kant. 1935. (Jaspers, Rechenschaft und Ausblick, 1951, S. 90ff.)

四 自由と必然

上述せる所から既に知られるであろうように、ヤスパースにおける自由は現存在、意識一般、精神及び世界におけるそれぞれの必然性を媒介し、且つそれらを超えるものである。これ彼の包括者思想からみて当然のことである。即ち実存は上述の包括者の諸様式を包み越えるものだからである。更にヤスパースにおいては実存的必然性が考えられているが、今は自由と必然との関係を主題として考察しよう。

「自由のあらゆる様式は、必然性として自由の抵抗、Widerstand であるか或は自由の法則、Gesetz であるか或は又自由の根源、Ursprung であるかであるところの一つの束縛に對立する意味をもっている。自由の意識は必然性に對する對立又は必然性との統一において展開する。あらゆる對立を超越してしまった自由は一箇の幻影である。」(II, 191—192) ヤスパースはかくの如く自由と對立するか或は自由との統一においてあるかである必然性を「抵抗」、「法則」、「根源」として見ており、この三種の必然性との関係において実存的自由を論述する。

第一の必然性。—「自由の抵抗」となるものは必然性によって規定される「自然 Natur」(II, 192) である。「存在を自然として肯定する場合には、自然はそのものとして善であり、且つ私が在るがままに私は善である。猷身的に私は私の本能、衝動、傾向及び氣紛れに身を委かせそして常に回帰する美しい瞬間に信頼をよせる。」(ebd.) このような自然必然に根拠をおく「自然主義倫理学」(ebd.) も、それと反対に自然必然に反対して実践的に自由を自然の

現実の如何に拘らず独立に考えようとする「英雄倫理学」(ebd.)も、共に抽象的な両極端であるとして、ヤスパースはそれらを斥ける。彼は自然は所与として「自由にとって依存性、抵抗、衝突、素材を意味する」(II, 193)と言ひ、これとの対立において、これを媒介し、これを超えて、自由が存することを認めている。

第二の必然性。―これは「自由の法則」としての必然性である。當為法則性としての必然性である。「自然の所与性に対して意志は他の、自然法則的ならざる、當為法則的な必然性の意識における超越論的自由から活動する。かかる必然性は命令或は禁止としての諸命題において公式化される。その場合やがてその明証性の承認において自由から生じているかかかる諸の妥当的なものは法則性という拘束する重荷となる。かかる必然性に対して根源的実存的自由から葛藤が生ずる。新たに生ずる自由は、以前に自ら自由から存在していたところの一の必然性に対するものとして自らを理解する。新たに生ずる自由は、妥当するものの新たな形式を創造するために、硬化せる要求に対抗して自己を貫徹しなければならぬ。」(II, 193) かくの如く、実存的自由に基づいて成立つカント的な意志(超越論的自由)も法則として固定されると眞の自由に対する束縛となるから、創造的な、そして「絶対的なものに基づく」(ebd.)実存によってそれは再び突破されなければならぬ必然性なのである。

実存的自由は上述の二つの必然性を媒介して、更にそれらを超越する。「実存的自由はそれ故に、現実的なもの止揚不可能な抵抗としての自然法則性 *Naturnotwendigkeit* と規則の固定せる形式としての當為法則性 *Sollensgesetzlichkeit* との二つの必然性の間に自らを見る。実存的自由は両者の間において消耗される危険においてある。実存的自由はしかし、両者の内部で密接な接触を保ちつつ運動することなく両者を全く回避しようと欲する時は、妄想の中に自ら自身を喪失せざるを得ない。」(ebd.)

第三の必然性。―これは実存的必然性であって、それは二様のものである。その一つは(一)、実存の過去における自

己存在の決断が現在及び将来における決断を拘束することを意味し、も一つは(二)、実存の自由からの根源的決断が同時に超越者からの限定として、選択の余地のない絶対的確實性であるという意味のものである。

(一) 前者については先ず次の如くに言われる。「自由はその客観的現在においては恣意と見えるかも知れないが、実存的根源においては正に必然的なものとして自らを知るのである。……私が今まで為したところのものによって私の将来の行為へと置かれたところの必然性は、同時に他者の必然性の如くに私自身によって私を規定するところの自己〔固有〕の必然性である。あらゆる実存的選択はその都度一回的に遂行されて取消され得ないところの或る究極決定的なものとして明白になる。選択において自由に、私は選択によって私を拘束し、首尾一貫性を遂行し且つそれを担うのである。かかる決断の明き意識が選択を実存的選択とするのである。従ってあらゆる決断は私の歴史的現実の形成において一の新たな根拠となる。」(II, 195)過去の決断が永遠に触れる故に、それが一貫して実存を貫ぬぎ新たな決断の基礎としてそれを制約すると言わざるを得ないであろう。しかしかかる拘束は現存在的な拘束、例えば習慣による拘束とは異なるものであろう。「今や私は私の行動によってそのように成ったところの経験的に現実的なものによって拘束されないで、却ってそれを私が自己創造として選択の瞬間において私自身においてなしたところの歩みによって拘束される。私が私を欲したように私は成り来った。たとえ時間においては尚お常に可能性は残るとは言え、しかし私の存在は今や自ら自身によって拘束されているしそして私の存在は同時になお自由でもあるのである。」(II, 195-196)依然としてかかる必然性の根拠は超越者であるからこそ、実存の本来性たる自由が、実存の根拠たる超越者に根ざす必然と一致し得るのである。「あらゆる新たな選択において自ら〔固有〕の歴史的根拠による拘束として出現するかかる必然性は、ここに私は立っている、私は他様にはあり得ない⁽¹⁾という意識において、即ち実存の最も根源的な自由の決断と結ばれているところの必然⁽¹⁾ (Müssen)の意識において出現するところのより深い必然

性 die tiefere Notwendigkeit を頭わにする。……絶対的自由は絶対的必然である。……かかる必然性は決して洞察されもしないし導出されもしない。自然必然性と当為法則性とは対象的にそして妥当的に把握される、しかしかかる実存的必然性 existentielle Notwendigkeit は対象的に又妥当的には把握されない。即ち、従って決断の高き点におけるすべてを賭する冒険があり、従って外部から及び諸の根拠によって決断を導き得ることの不可能性があり、又それ故にこそその遂行における根源的実存意識の深さと確信とがある。」(II, 196) かかる、対象を超えた実存的必然性は前述の如く超越者に根ざすと考えることからそれは開明され得るものである。

かかる実存的必然性は「自由と必然との統一」(II, 195)であり、かかる統一は根源的には実存を超越している超越者による実存そのものの限定を意味する。実存の根拠である超越者に根ざすかかる実存的必然(それは自己決断の自由によって生ずる必然であるが)は実存によって引受けられるべきである。引受けられるべきかかる必然が責め Schuld である。そしてかかる必然を引受けるときであると感ずることが責めの意識である。⁽³⁾このような責めはどうしても実存的自由がつき当らねばならぬものである。「私の自由において責めの必然性としての或る他者に私はつき当る、その責めは自由を止揚するように見えるが、しかし私が引受けることにおいて私の自由を私の責めの承認によって守る bewahren ということによってのみ私に対して存在しているものである。」(II, 197) そして「責めの始源」(ebd.)は私には知られ得ぬものであり、「私の責めは私の自由存在によって限定され得るものであり且つそれ故に測り知れないものである」(ebd.)し、「私は既に私の自由によって責めあるもの schuldig bin」(ebd.)ことは、私の根源としての実存的必然は私の知の対象たり得ぬことを示すものであって、包括者としての実存の思想からの当然の帰結である。そしてかかる責めの根源である超越者は私が自由に意志することによって私に現われる。「私が自由に意志する、如き仕方において私に対して超越者が現われ得る。」(ebd.)かかる超越者の現前は勿論超越者そ

のものの出現ではないけれども。

ヤスパースのかかる責めの必然性の強調は、彼の自由は超越者に絶対随順すること（依存性）によってのみ純粹な自由であるかの如き感を与える。それならば彼の自由は単に必然に従うのみであって、立場は異なるにせよ自然主義が自然必然に従うことが自由であるとするのと同様であって、専ら神の摂理乃至神の予定せる秩序に従うことのみが自由であるかの如くである。果してヤスパースがかかる宗教的な見方に止っているであろうか。彼は「依存性と独立性」(II, 197ff.) において、神への全き依存性と、「私は、私自身を創造する」(II, 197) とする、すべてを自己から出、自己にすべてが帰すると見るところの全き自己独立性、との両者を共に抽象的であるとして、「この二つの思想の緊張」(II, 198) が彼の自由の立場を示すものとしている。「私の行為と存在との無制限の責任における意志自由の経験」(ebd.) と「実存の超越的關係性における意志無力の経験」(ebd.) という必然性（意志無力）の経験との統一が如何にして可能であるか。かかる二律背反が真なる所以如何が問題である。この問題への解答の根源は実存的自由が超越者によって贈られたものであるという第二のそして最深の実存的必然性である。今や我々はそれへと進まねばならぬ。

(二) 実存的必然性の第二の場合。―恩寵の絶対化と自立的自由の絶対化とを斥けて、超越者への全き依存性と自己の全き独立性との緊張による自由の本質を遂行する者は、正にその最高の実現において、自由が超越者によって可能なことを経験するのである。これこそ最深の必然性の自覚であるが、この自覚への道は自由の最高の実現を通らねばならぬ。はじめから良心が超越者の声を直接にきいてそれに従う態度ではかかる自覚に到達できない。「良心の声は神の声ではない」(II, 272)、「私が自由であることによって、私は自由において、しかしただ自由によって、durchのみ、超越者を経験する」(II, 198)、「超越者は私の自由ではないけれども私の自由において現前している」(II, 199)

ということによつてもそのことは理解され得るであらう。自由を通さない必然の自覚は自由の本質を誤るものである。しかし何故に実存が世界定位に満足し切れないのか、内在的なものを根拠とする自由は満足し切れないのか、そして何故に実存の自由を超越者を根拠として考えるのか等を我々がヤスパースに即して考える時、その際には、彼の哲学する根源に所謂哲学的信仰が、即ち世界と人間と超越者との存在を信じつつしかも存在そのものは超越者そのものであるという信仰が、彼にあるからそうなのである、ということ了我々は知らざるを得ない。

自由が超越者によつて贈られたもの、存在せしめられるものであるという実存の経験は次の如くに語られる。長文にわたるが引用せざるを得ない。「正に、それにおいて私が自然法則の必然性と当為法則の必然性とを包被すると思うところの私の自己存在の根源において、私は自ら創造しなかつたということを私は意識する。……私が全く私自身である場合には、私はもはや単に私自身ではない、ということが私に対して明らかになる。……私が意欲において本来的に自らであつた場合には、私は同時に私の自由において与えられていたのである。私は或る他者によつて私が成る如くに存在しているが、しかしそれは私の自由存在の形式においてそうなのである。二律背反——私は私によつてのみでは、私が私から *aus* 存在するところのものではあり得ない。私は私からそれであるから、私には責めがある。私は単に私によつてのみそれであるのではないから、私に与えられたものとして、私は私が欲したところのものである。——かかる二律背反は自由の意識と必然の意識とが超越者において一つとなることに対する表現である。私が自由から私を把握したことにより、それにおいて私の超越者を把握したのであり、私は私の自由そのものにおいて超越者の消滅する現象である。……超越者によつて私は可能的実存として即ち時間現存在における自由として存在する。この世界のあらゆる形体とあらゆる權威とに反しての自由と独立性とのための決断は超越者に反しての決断を意味しない。全く自主独立的な者は超越者に直面して最も決定的に、彼を全く彼の神の手の中に委ねるところのかの必然性を

経験する。」(II, 199—200) かくの如く自由の極限における経験は自由が超越者より与えられる必然であると意識することである。これは自由と必然との最深の統一を語っているが、かかる統一は上述の信仰に基づくのである。そしてかかる信仰を可能にするものは次節に述べる愛である。

(1) ルッター的なかかる必然が固定化する時には、独断に陥るであろう。

(2) 自由と必然との統一は様々の立場から可能であろう。例えばブレハーフにおいても「自由は必然と一致する」ものであり、

その「自由とは意識された必然である」が、その必然はマルクスの唯物論的必然であって、勿論ヤスパースの実存的必然とは異なるものである。(ブレハーフ著木原正義氏訳「歴史における個人の役割」、岩波文庫五一二〇、特に同書一八頁以下「自由と必然」参照)

(3) Vgl. Jaspers, Philosophie II, S. 196.

五 実存的自由の根拠

以上においてヤスパースにおける実存的自由が彼の哲学の根源から成立つ所以のものを折に触れて諸所において述べて来たが、今はそれらに関連するまとめとしての一つの考察を試みようと思う。限られた紙数故勿論詳論は不可能である。

実存的自由は自己選択であり、本来的自己への決意であるとヤスパースは考えるが、かかる選択・決意を可能にするものは実存の自己限定としてのかかる選択・決意をなし得る、という実存そのものの可能性でなければならない。この可能性は選択・決意を可能ならしめるという意味の可能性であって、それは実存そのものの根源的本質的な性格である。この性格によって選択し決意し得るのであって、選択・決意が自由であるという表現は厳密に言えば不正確であって、選択・決意は自由によって可能であると言わなければならない。選択・決意は実存の自由という性格におい

て作用すると言え、それは正しいのである。上述せる所のものとの関連において言えば、「媒介」・「交通」・「必然性」との関係において「無制約的」・「直接性」を以て選択・決意を可能にするものが自由なのである。

かかる自由は「実存開明」を一貫して開明されていると見なければならぬ。「実存開明が我々にとって哲学することの枢軸であるとすれば、絶対的意識は実存そのものの最も内的なものに的中する」(II, 36)とヤスパースが言うことを手がかりとして、私はこの絶対的意識の諸性格から自由の可能根拠を求めてみよう。

絶対的意識とは実存の意識のことであり、その根源的在り方としての性格は愛 Liebe において求められ得る。⁽¹⁾勿論この愛は実存の意識なるが故に、現存在、意識一般及び精神のそれぞれにおける愛を包み且つ越えている。愛は「あらゆる包括者の包括者」(V. d. W., 992)であるから、包括者のあらゆる様式の地盤としてそれらに魂を吹込むものである。即ち愛はそれらを貫いて、それらを真ならしめんとする真理の根拠である。「真理は愛において獲得された決意から生ずる。」(V. d. W., 987) 実存的自由が媒介的であり、交通的であるのは愛のかかる包括者としての性格に基づく。

包括的な「愛は結合するものであり、そして存在するものの紐帯である。」(V. d. W., 991)「愛は一つとなることとの衝動 der Drang zum Einswerden」(ebd.)であり、且つ「一つであることとの顕現」(ebd.)である。「後述する如く愛には公明な分離の性格があるが、真なるものの結合性とその根本性格である。この結合性によって、決意が交通的であることが可能になり、実存的必然の一貫性、直接性が可能になる。かかる結合性が実存の忠実・信頼を可能にし、忠実・信頼を以ての決意を可能にする。

包括的な愛は実存の主体的真理そのものであって、あらゆるものを真に見、真ならしめんとするものである。愛において「我々が存在するものに対して公明に offen なる」(V. d. W., 991)ところのこの愛の公明性 Offenheit は

無限に開いており、如何なる權威にも盲従しないし、如何なる有限なものもそれを絶対化しない。「我意の抹消」(ebd)をなす無限の広さが愛の公明性の性格である。それ故に包括的な愛はあらゆるものの絶対化を斥けると共にあらゆるものに対して眼を閉じない。それは「爛眼」(II, 277)である。無限に開いているが、しかし愛は単独者たる実存の意識なるが故に、愛には単独性があり、「愛には一回性がある」(II, 278)愛においては単独性と公明性とは不可分である。勿論単独性は単なる孤立性を意味しない。それは歴史性としての具体性である。歴史的回一性において自らを選択することは愛の単独性・唯一性に基づき、媒介的でありつつしかも選択・決意が無制約であり、直接的であり、如何なる必然に対しても開いていることは公明性に基づく。

しかし公明性は、実存が自己に関係することによって超越者に関係するものであること、従って、実存の意識たる愛が超越者に向い超越者の存在を信じているところの「根拠」であること、によって公明性たり得るのである。愛は「内在における超越者の疑無き現在」(II, 277)である。「存在者を超えて存在そのものに向う」(V, d. W., 991)愛は一切の有限なものを越えている超越者に直面して、はじめて無限の公明性を以って決意し決断し得る。愛は根拠であるとは愛は内在的なものによつては根拠づけられないものであることを意味する。私の選択も意志もかかる愛から生ずる。「愛から、私が私を愛において選択するということが生じ、そして又私が愛によつて意志するということが生ずる。」(V, d. W., 989)決意の根拠は愛である。「愛は私の本来的な自由である。」(ebd)愛そのものが自由である。決意も選択も愛の自由の作用にすぎない。

そしてかかる無制約的決意は、愛は結合であると共に分離であるという性格によつて可能なのである。この性格は単独者を公明に愛するところから来る。公明な、そして単独なものに向う愛は個々のものを真に明らかに存在せしめ、誤れる同一化を斥けて、区別するものである。「同一化はもはや愛ではなく。」(V, d. W., S. 1006)この公明な区

別する働らきが決意をそれたらしめるのである。この区別する働らきをもつ愛は動であると共に静であり、動静両面をもつものである。⁽²⁾ 先ず愛は無限の運動であり、可能的実存が現実的実存となるための自己生成という自己運動の源泉である。「根源における運動」は愛の運動である。愛は上述の如き諸性格を以って無限に求める運動である。愛は神の所有でもなく、又現存在の所有でもない。愛は中間者としての人間の道である。⁽³⁾ 自由は超越者においても現存在においても存しないということはこの愛の性格に基づく。そして現存在の中にありながら超越者に直面して運動する愛は、この運動における安静をもっている。愛の安静は現存在（内在）に安息、安住することではなくて、それは結局超越者によって存在せしめられているという信仰の安静なのである。⁽⁴⁾ かかる信仰が、即ち哲学的信仰が、実存の最深の必然性を可能にする。

実存的自由と実存的必然性との統一は如何にして可能なりやの間も、上述せる愛の性格によって解答され得る。即ち、かかる統一の可能根拠は簡単に言えば、自由の主体たる実存の本来性は愛であり、この愛は選択・決意としての自由をもつと共に実存の必然性を感得するもの、確信するものだからである。究極においてそれは実存的自由も実存的必然も共に超越者を根拠としているからである。この統一はその両者が同一の根源に由来するという愛の信仰によって可能なのである。それは可能的実存の自己生成の可能性としての自由はもともと一充実されていない時でも一超越者に直面して、それを本来の存在であると信じている愛の性格だからである。しかしかかる超越者は愛が無限の公明性において直面するものであって、それは一切の有限なものを越えている。かかる超越者は神についての教義をも越えている。⁽⁵⁾ かかる存在そのものに根拠をおく愛の自由が無制約的であるのは当然である。

ヤスパースのかかる最も根源的な愛は、そのロゴスとして理性をもつが故に、実存的自由は実存理性を以って行われる。彼にあっては理性は自由によって貫かれている。それは自由は愛の理性の本質だからである。かかる愛の信仰

たる哲学的信仰が自由であるのも当然であって、それは「信仰は明確に意識されたものとしての愛の存在、信、Seins-
gewissheit である」(II, 279) からである。又彼の包括者思想も絶対的意識の展開であるから、それは実存的自由の開
明の道具となる。今はこれらのことを指示するに止め、その論述は後の機会を待たねばならぬ。

(1) ヤスパースにおいては「充実せる絶対的意識」とは絶対的意識の本来性であるが、その三契機たる愛 Liebe、信仰 Glaube、空
想 Phantasie の中最も根源的であり、中核をなすものは愛である。「絶対的意識は愛として開明される、愛は能動的には信仰
でありそして無制約的行動に至る。愛は瞑想的には空想であり、そして形而上学的呼び出しとなる。」(Philosophie II, S. 276)
この愛が「根源における運動」の源泉であること、従って良心の源泉であることについては「哲学」第二巻二七七頁参照。尚
おかかる愛のアガペー及びエロースとの関係については拙稿「ヤスパースにおける超越者の位置」(弘前大学「人文社会」第
十三号所載) 参照。

(2) Vgl. Philosophie II, S. 278. und Von der Wahrheit, S. 989-990.

(3) Vgl. Von der Wahrheit, S. 1012-1013.

(4) 拙稿「ヤスパースの哲学的信仰について」(実存主義研究会編「実存」第六号所載) 参照。

(5) 拙稿「ヤスパースにおける超越者の位置」(弘前大学「人文社会」第十三号所載) 参照。